



祭典の感動を分かち合うため、 力をあわせて、最後の「峰」を必ずこえよう

9月25日、「日本のうたごえ祭典 in 長崎」運営委員会は、祭典を目前にして、長崎のうたごえ協議会と実行委員会のみなさんに、「祭典の感動を分かち合うため、力を合わせて、最後の『峰』を必ずこえよう」との訴えを發表しました。すべての団やサークルで、緊急にでも話し合いをもって読み合わせ、気持をひとつにがんばりましょう。(その要旨を掲載します)

鉄橋で3回目の宣伝 チケット求める人も

24日午後、長崎市の鉄橋で3回目となる祭典宣伝を行いました。諫早からも4人が駆けつけ、「ぜひお出かけください」と声をからして呼びかけました。駆け寄ってきた障がい者が、「楽しみにしています」と、チケットを買い求めました。「チケット買いました」といって、チラシ配りを手伝ってくれる人もいました。(写真)



諫早では宣伝カー

21日、宣伝カーの定員いっぱいの6人が乗車し、西諫早地域と中央商店街地域をまわりました。一つひとつの商店を訪ねてポスターを張り出しをお願いし、チラシも預かってもらいました。断られる所はなく、この日のポスター張りは21枚でした。

運転を担当の宮崎さんは、「みんなで回ればこわくない」とばかりに、楽しみながら行動しているのを見て、「諫早の元気の源をみた」と話していました。

祭典実行委員、うた新読者のみなさんへ

「日本のうたごえ祭典 in 長崎」

運営委員会の訴え(要旨)

日本のうたごえ祭典が被爆地長崎で開かれるのは初めてのことです。核兵器廃絶への流れが大きくひろがっている今、被爆65年を記念して開かれる今回の長崎祭典には、特別の重みがあります。

のべ一万人を超す参加者とともにつくりあげる今回の祭典の取り組みは、これまでどの分野をみても経験したことがありません。この祭典の成功がもたらす感動と経験は、今後の平和・民主運動のなかで、新たな前進を切り開く土台となるだけでなく、県民の音楽文化の発展に貢献するに違いありません。

私たちは、昨年2月の実行委員会結成以降、多くの人たちの支援と期待の中で準備を進めてきました。賛同金の目標を達成し、企画でも、池辺晋一郎氏と浅井敬壹氏の指揮による

大合唱が実現します。長崎北高オーケストラなど若い世代の人たちが次々に登場するのも魅力の一つです。私たちは、14もの祭典合唱団を組織し、日々練習を積み重ねるなど、多くの困難を乗り越えてこままで前進させてきました。

開演まであと二十日足らず、私たちは最後の「峰」であるチケット普及で、ブリックホールの座席の頂上が見えるところまで押し上げてきました。いま最も遅れているのは16日の県立総合体育館(アリーナ)での大音楽会のチケット普及です。現状は地元の目標が2500に対して、1000席を超えたところです。

私たちの目標は会場を満席にして当日を迎えることです。それは長かった祭典成功への取り組みの総仕上げでもあります。

これまでの前進に確信をもち、祭典の大きな感動を分かち合うため、チケット普及を最優先にして全力をあげましょう。力を合わせて、最後の「峰」を必ず乗り越えようではありませんか。

(2010・9・25)

県母親大会で、「うたごえ」分科会 「秋」を歌い、祭典参加をよびかけ 平野さんが、高校生の署名活動を語る

♪開幕まで
あと18日



9月26日、長崎大学文教キャンパスで県母親大会が開かれ、第6分科会「生バンドで思いっきり歌おう」が長崎のうたごえ協議会が担当して行われました。「もみじ」や「赤とんぼ」などを楽しくうたいながら、「日本のうたごえ祭典 in 長崎」への参加をよびかけ、「参加者に、祭典を満席にして迎えるためにあと一回りチケットを広げてほしい」と訴えました。(写真)

大会の全体会では、高校生一人署名活動をサポートしている平野伸人さんが「未来を築くために」と題して講演。家族の被爆体験や、幼い友人を白血病でなくして被爆二世を意識したこと。高校生一人署名活動に関わるようになった経緯を分かりやすく語りました

同氏は、署名活動について詳しく紹介。活動が始まって13年間に約400人が関わり卒業していったこと。高校生の自主性を育て、自ら学んでいったことで、長く活動が続けられてきたと教訓を紹介。「参加した高校生みんなが一生懸命考え、行動をするなかで、一人ひとりが力をつけていった」と、高校生自身の自主性の大切さを繰り返し強調しました。

高校生2人を含む合唱団で「一本のペンで」「ねがい」を歌いました。

こんなこともあるんですね！

街頭宣伝でチケット買ってくれた人と、ある食堂でバッカリ。会話がはずみました。

☆「16日が楽しみ。あなたたちも出るの？」

◆「出ますよ」

☆「あなたたちは、とてもいいことしていますね。応援しています。がんばってください」

◆◆「すごうれしかった。がんばっていれば、こんなこともあるんですね。街頭で買ってくれた人ですよ。(S/A)」

いま、平和ボランティアが生きがいです



劇団TAB-HAKU主宰

津田桂子さん

全国にまだ女性のディレクターがめずらしかった頃から、CMやドキュメント番組を作っていました。フリーになってもう30年になります。

私は、胎内被爆者です。そのためかどうかはわかりませんが、虚弱体質で体育の授業はすっと出たことがありますでした。だから、少女時代から自分で脚本を書いて、劇を作るのが好きでした。

健康にはずっと気を使ってきましたからいまは元気です。子どもたちへの本の読み聞かせや、平和に関することへのボランティアが私の生きがいです。

「平和音楽祭」に最初からずっと関わらせていただきました。今回の「うたごえ祭典」では、長崎と坂本龍馬の関わりを短いお芝居で紹介します。

祭典にこられた全国のお客様や、長崎の人たちに「いい音楽会だった、よかったね」「感動した」といってもらえる舞台づくりのお手伝いができればと思います。

「歌のこと、演じること」ができるのは、平和の証ですから。
(大音楽会でお芝居を担当していただきます)